



「森アートアワード」の初代グランプリは 片山真理 に



左から、ユージン・タン、スハーニャ・ラフェル、片岡真実、片山真理、フランシス・モリス、ラーナ・デヴェンポート 撮影：田山達之

一般財団法人森現代芸術財団（MoriCAF）は、2025年5月に次世代の現代美術を牽引する中堅アーティストを支援するために「森アートアワード」を創設しました。このたび、国際選考委員会による「森アートアワード2026」の最終審査を2026年2月25日に実施し、グランプリに片山真理を選出しました。本アワードが日本の現代美術の現在地を示すとともに、受賞者のさらなる国際的な飛躍に繋がることを願っています。グランプリ受賞者には、賞金1,000万円に加え、作品展示の機会（森美術館との共催）が提供されます。また、ほか3名のファイナリストには、それぞれ賞金100万円が授与されます。MoriCAFは、初代代表理事・森佳子が現代美術に寄せた深い想いと、日本の現代美術の持続的発展および国際的な文化交流への志を受け継ぎ、本アワードをはじめとする活動を続けてまいります。最新情報は、財団公式サイトにて順次公開予定です。ぜひご注目ください。

森アートアワード2026総評

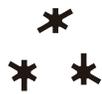
森アートアワード2026のファイナリスト4名は、いずれも多様なメディアやテーマを扱いながら、アートが世界に和解をもたらすことができるという深い確信を共有し、困難な課題に挑む情熱と勇気を持っています。本アワードは、日本の中堅アーティストのさらなる国際的飛躍を支援するために設けられました。個人的な問いであれ地球規模のものであれ、テクノロジーや地政学に根ざしたものであれ、個々の関心事を超えてより広い世界へと届くことがアーティストたちに求められます。

グランプリに選ばれた片山真理さんは、フィルム写真や刺繍・縫いものなどの手仕事を通じて、自身の身体境界を拡張する可能性を力強くポジティブに提示しています。近作《tree of life》は彼女のさらなる飛躍を予感させるものでした。すでに国際的に評価されたアーティストとの多角的な比較も可能なその実践は、力強いイメージと強固な概念的枠組みの融合によって、文化的・社会的な境界を越えていくことが期待されます。

森アートアワード2026 グランプリ/ファイナリスト

グランプリ 片山真理

ファイナリスト 小泉明郎、目[mé]、山城知佳子



森アートアワード 2026 アーティスト

グランプリ

片山真理

1987年生まれ、群馬在住

自身の身体の中で日々を生きることを制作の核に据え、その身体を生きた彫刻、マネキン、そして社会を映し出すレンズとして制作を行う。また、手縫い・手作りのオブジェと写真の組み合わせによって「自然、人工、正しさ」といった社会の規範的な考えを映し出し、それに挑戦する作品を作り続けてきた。作品制作の他に『選択の自由』を掲げた「ハイヒールプロジェクト」を開始。義足用の特注ハイヒールを装着し、歌手、モデル、講演など多岐に渡り活動している。主な展覧会に、「Performer and Participant」テート・モダン（ロンドン、2023年）、「home again」ヨーロッパ写真美術館（パリ、2021年）、第58回ヴェネチア・ビエンナーレ「ジャルディーニ、アルセナーレ」（2019年）、「六本木クロッシング2016展：僕の身体、あなたの声」森美術館（東京）など。<https://marikatayama.com/>



《caryatid #011》2024年
©Mari Katayama, courtesy of Mari Katayama Studio and Galerie Suzanne Tarasieve, Paris

ファイナリスト 姓のアルファベット順

小泉明郎

1976年生まれ、神奈川県在住

個人的な感情と集合的記憶の間の緊張関係を探求し、政治的、文化的、あるいは技術的な権力システムが個人をどのように形作るのかを考察する作品を発表している。ビデオ、ドローイング、彫刻に加え、近年ではVRやAIを取り入れた作品によって、強い表現をもって観客の感情を揺さぶりながら、国家権力、戦争、歴史、権力による抑圧や個人人の痛みなど、社会に潜在する様々な事象や声を浮かび上がらせる。主な展覧会に「シアターズ・オブ・ライフ」デ・ボン現代美術館（ティルブルフ、オランダ、2025年）、「地球がまわる音を聴く：パンデミック以降のウェルビーイング」森美術館（東京、2022年）のほか、VR演劇「縛られたプロメテウス」（2019年）など。

<https://www.meirokoizumi.com/>



《生の劇場》2019年
展示風景：「小泉明郎：シアターズ・オブ・ライフ」展、デ・ボン美術館（オランダ、ティルブルフ）2025年
photo by the artist

目[mé]

2012年結成

アーティスト 荒神明香、ディレクター 南川憲二、インストーラー 増井宏文を中心とする現代アートチーム。連携を活かしたチーム・クリエイションによる制作活動を展開。観客を含めた状況／導線を重視し、「いつも我々の眼前にある”ただの世界”を、あらためて経験する」ような作品を試行する。主な展覧会に「非常にはっきりとわからない」千葉市美術館（2019年）、「たよりない現実、この世界の在りか」資生堂ギャラリー（東京、2014年）のほか、国内外で「まさゆめ」などのプロジェクトも行っている。「さいたま国際芸術祭2023」ではディレクターを務めた。

<http://mouthplustwo.me/>



《まさゆめ》ヴェラノス・デ・ラ・ヴィジャ 2024年
（スペイン、マドリッド）
Photo : Madrid Distino/Fernando Tribiño

山城知佳子

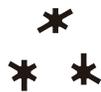
1976年生まれ、沖縄と横浜在住

生まれ育った沖縄の複雑な歴史や地理的・政治的問題を、自身の身体を通して映像やパフォーマンスで探求。地域を超えた普遍的なトラウマや記憶の継承を問い、社会の分断や歴史の多層性に光をあてる。初期の作品では、過去を個人の存在から捉え、批評性のある表現で見る者に沖縄の記憶や歴史への新たな視点を提示。近年は沖縄を起点に東アジア地域まで視野を広げ、歴史の陰に埋もれた人々の身体や魂、声を掘り起こそうと試みている。主な展覧会に「ジャム・セッション 石橋財団コレクション×山城知佳子×志賀理江子 漂着」アーティゾン美術館（東京、2025年）、個展「The Song of the Land」グルベンキアン・モダンアートセンター（リスボン、2024年）、個展「ペラウの花」丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（香川、2023年）

<https://ycassociates.co.jp/artists/2019/03/20/218/>



《Recalling(s)》2025年
「ジャム・セッション」石橋財団コレクション×山城知佳子×志賀理江子 漂着」展示風景
アーティゾン美術館（東京） 写真：畠山直哉



選考委員会・推薦委員

2026 国際選考委員会

- 片岡真実(森美術館 館長、選考委員長)
- ラーナ・デヴェンポート
(南オーストラリア州立美術館 元館長[アデレード])
- グレン・ラウリィ
(ニューヨーク近代美術館 名誉館長)
- フランシス・モリス
(テート・モダン 元館長[ロンドン])
- スハーニャ・ラフェル
(M+館長[香港])
- ユージン・タン
(ナショナル・ギャラリー・シンガポール 館長、
シンガポール美術館 館長)

森アートアワード 2026 推薦委員

姓のアルファベット順

- 趙 純恵(森美術館 アソシエイト・キュレーター)
- 角 奈緒子(金沢21世紀美術館 学芸課長)
- 木村絵理子(弘前れんが倉庫美術館 館長)
- 中村史子(大阪中之島美術館 主任学芸員)
- 徳山拓一(森美術館 シニア・キュレーター)
- 椿 玲子(森美術館 キュレーター)

活動基本概要

財団公式サイト <https://mori-caf.jp/>

* ** Mori Art Award

森アートアワード

日本の現代アーティストのなかでも、とりわけ中堅作家が次のグローバルなステージへ羽ばたくための表彰制度として、「森アートアワード」を実施する。2年に一度開催される本アワードでは、過去2年間に発表された優れた展覧会や作品をもとに日本国内の推薦委員によってアーティストが推薦され、国際選考委員会による書類選考を経て4名のファイナリストが選出される。その後、最終選考（プレゼンテーション等）を経て1名のグランプリ受賞者を決定し、賞金1,000万円と受賞を記念した作品展示の機会（森美術館との共催）が提供される。ほか3名のファイナリストにはそれぞれ賞金100万円が授与される。

- 対象：日本を拠点に活動、あるいは海外拠点であっても日本と関係の深い中堅アーティスト。年齢制限は設けない。
- 推薦委員：全国の公・私立美術館のキュレーター 6名
- 選考方法：一次選考を書類選考（オンライン）で実施し、ファイナリスト4名を選出。最終選考は、対面による国際選考委員会へのプレゼンテーションと面接によりグランプリ受賞者1名を決定。

* ** Curator Residency Program

キュレーターレジデンスプログラム

日本の現代美術に関心を抱く海外在住のキュレーターを招聘し、日本で活動する様々なアーティスト、美術館、国際展、ギャラリーなどの調査、交流の機会を提供し、その成果を海外の舞台で発信してもらうことで日本の現代美術の国際的な発信を後押しすることを目的とする。

- 対象：日本国内の現代美術のリサーチを希望する国外在住のキュレーター（国籍不問・日本在住者は対象外）
- 人数：3～4人/年
- 募集方法：財団公式サイト上にて公募
- 期間：2週間～3ヶ月程度
- 対象キュレーターは、レジデンスプログラム終了時に、成果報告を実施する。